著者が語る

「ロシアトヨタ戦記」の西谷 公明さん

縮こまらず前に進む

希少な本である。舞台は、ソ連崩壊後に経済を急成長させていた2000年代のロシア。役者は、他社に先駆けて進出したトヨタ自動車。「ロシアトヨタ」元社長でエコノミストの西谷公明さんのこの回顧録は、史実を追体験させる優れた歴史書のようでもあり、壮大な紀行文のようでもある。

「私はこの本を、特異な経験を売り物にするビジネス書にすることを、絶対に避けたかった。一つの時代をそのまま書き残す。そんな大それた思いで執筆しました」と照れたように笑う。

1990年代末。バブル経済崩壊のあおりで、日本長期信用銀行が破綻した。その子会社「長銀総合研究所」から、在ウクライナ大使館に出向し、専門調査員をしていた西谷さんは、帰る場所を失う。

救いの手を差し伸べてきたのがトヨタだった。日本での勤務を経て、2004年にロシアの現地法人の社長となる。

ミッションは三つ。販売基盤を整える。次に現地での生産プロジェクトを始める。それが軌道に乗った暁には、首都モスクワの中心部に本社社屋を建てる。「立ち止まっている暇はありませんでした。当時のロシアはおそらく、高度経済成長に入った頃の日本と似ていたと思います」

「トヨタの人々はものすごくスピード感がある。私はゆっくり話すタイプですが、上司から最初に掛けられた言葉が『もうちょっと早くしゃべってよ』だった」と話す西谷公明さん

00年前後のトヨタの経営方針は「石橋をたたいても渡らぬ」と評されるほど慎重だったという。政治的不安定さが拭えないロシア進出は「社内にリスクを危ぶむ声もあった」。しかし、トヨタの会長だった奥田碩さんの肝いりだったと言われるこの挑戦こそが、トヨタを世界的企業へと飛躍させたとみる。

「今、あえて当時のロシアについての本を出すのは、低成長が続く日本で、奥田さんの『変わることよりも、変わらないことのリスクの方が大きい』という考えを伝えたかったからなんです」

08年秋のリーマン・ショックにより、ロシア経済が停滞。その際に犯した経営的な「失敗」を記して、この本は幕を閉じる。「小さくなって、縮こまっていては駄目なんです。前に進むしかない」。それは、人も企業も国も、同じである。

（「ロシアトヨタ戦記」は中央公論新社・2420円）

にしたに・ともあき　1953年愛知県生まれ、エコノミスト。長銀総合研究所などを経て、トヨタに入社。2004～09年にロシアトヨタ社長を務めた。著書に「ユーラシア・ダイナミズム」などがある。